

農林水産大臣賞受賞

びわ湖と共存した暮らし・農地・環境は、集落で守る

はやざきちょう じ ち かい
受賞者 早崎町自治会

ながはましはやざきちょう
(滋賀県長浜市早崎町)

■ 地域の沿革と概要

長浜市は、琵琶湖岸の北東部に位置し、北は福井県、東は岐阜県に接している。周囲は伊吹山山系の山々、中央には琵琶湖に注ぐ姉川や高時川、余呉川等により形成された豊かな湖北平野と水鳥が集う湖岸風景が広がり、県内でも優れた自然景観を有している。

気候帯は北陸型気候に属し、年平均気温は 13.9℃、年降水量は 1,553mm（長浜アメダスの平年値）を示し、晩秋の時雨と冬期の降雪（豪雪地帯）があり、冬期は天候の変化が著しい。

立地は、京阪神や中京、北陸の経済圏域の結節点としての位置にあり、京都市や名古屋市からはおよそ 60 km 圏域、大阪市からはおよそ 100 km 圏域にあり、J R 北陸本線・湖西線や北陸自動車道を主な広域交通軸として、これらの経済圏域と利便性高く結びついている。平成 18 年 10 月には J R 北陸本線・湖西線が直流化されたことにより「琵琶湖環状線」として京阪神圏はもとより、北陸圏への交通利便性がより高まった。

歴史・史跡は、北國街道やこの街道と中山道を結ぶ最短経路であった北國脇往還沿道、戦国時代を偲ばせる長浜城や小谷城跡、賤ヶ岳、姉川古戦場のほか、竹生島の宝厳寺、渡岸寺の国宝十一面観音をはじめとする数多くの観音が祀られる観音の里など、すぐれた歴史的遺産を有している。弁財天信仰の聖地と言われる宝厳寺（西国 33 番札所）や都久夫須麻神社（国宝）のある竹生島（琵琶湖の中の島）は、早崎町の「飛び地」であり両社寺の伝統行事に古来より深い関わりを持ち、早崎町では「宝厳寺蓮華神役」や「おこない（後述）」などの神事が現在まで連綿と受け継がれている。

第 1 図 位置図



滋賀県

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

早崎地区は、長浜市の南西部、湖岸寄りに位置し、全戸数 76 戸、人口約 251 名の集落である。かつて琵琶湖沿いに集落を形成していたが、西暦 992 年琵琶湖の増水によって水没し、現在地に集団移住したという歴史を持つ。そこには、県東北部の琵琶湖に突き出した河川の三角地帯に形成された旧びわ町及び旧湖北町にまたがる早崎内湖干拓がある。

早崎内湖は明治時代の治水事業（南郷洗堰（琵琶湖の水位を調整する堰）の建設）の影響で琵琶湖の水位低下と土砂が堆積したことによって形成されたもので、当時の暮らしは、魚と米と蚕の 3 つの「生業複合」により成り立っていたが、戦後の食糧増産の社会的要請を受けて、高度経済成長期に干拓地化され、現在は、琵琶湖水面より低いことから 4 台の排水機を使って背後地（干拓地外側の水田）とともに丁野木川を通じて琵琶湖に排水することにより農地として維持し、今日まで地域の食料供給に大きな役割を果たしてきた。

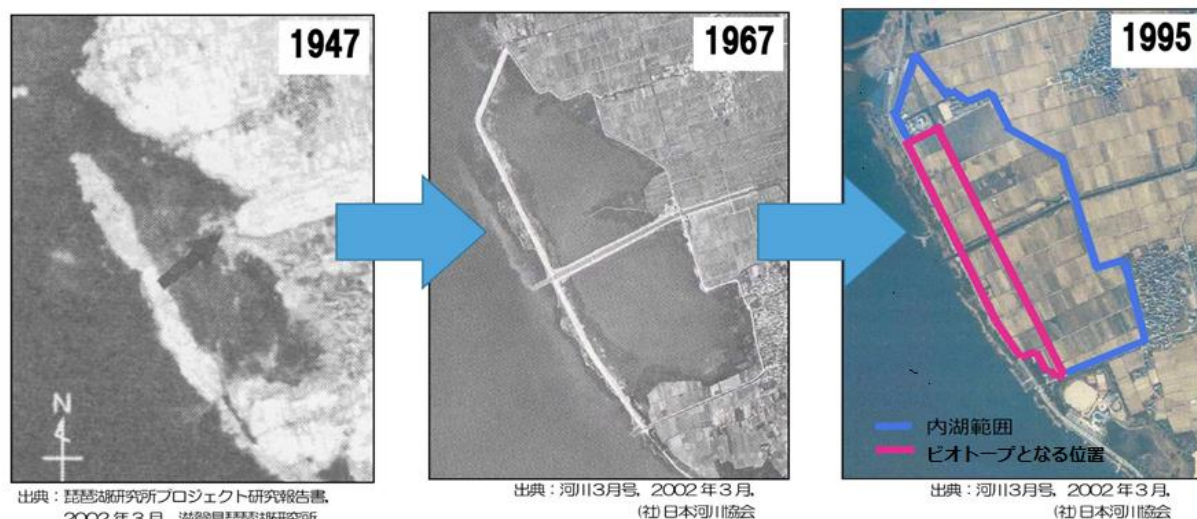


写真 1 干拓地化された早崎内湖

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

早崎内湖が、昭和 30 年代に食糧増産政策を受けて干拓化され、集落の水田面積は拡大した。しかし、米の増産時代の終焉や農業の後継者問題を背景に当地の利活用が話題に上る中、平成 7 年にリゾート業界からゴルフ場建設の計画が持ち上がった。

集落では、農業の先行き不安から新たな雇用創出の好機と捉える考えと、当時、全国的にゴルフ場における農薬問題がマスコミで取り上げられ環境を不安視する考えとが拮抗して熱い議論が展開され、最終的にゴ

ルフ場計画は白紙となった。

この時の経験は、早崎内湖が存在した時代には渇水時の藻の腐臭や大雨による水害などを何回も経験していることと相まって、結果として環境問題に対する意識を高めることになった。

このような背景から早崎町住民全員で構成する多面的機能支払制度の活動組織

「早崎・農地水環境守ろう会」や、町内有志で構成するNPO「早崎ビオトープネットワーク」の設立により集落の活性化につながる取組が始まった。



写真 2 集落と干拓田

イ むらづくりの礎形成の過程

早崎町では平成元年に「まちづくり委員会」を発足させ、「花のある郷づくり事業計画」の策定を行うとともに、その具体的な事業として「フラワーロードづくり事業」に取り組んだ。この事業は、集落内の主な路地に花の名の愛称を公募して名付け、沿線に該当する花を植えるというすべて手作りの事業で、6年間の継続事業として成功をみた。この「まちづくり委員会」の取組は、住民の意識改革につながり、集落内にコミュニティ活動への関心が一層高まって、幅広い年齢層の有志で構成される「友和会」が組織された。この友和会では、平成4年(1992年)に、早崎町が現在の位置に集団移住して1000年目の記念として、住民各戸から「百年後の我が家に伝えたいもの」を募って集落の一角にタイムカプセルを埋設し、その上にかつて集落の橋桁に使われていた石柱を記念碑として建立した。

この取組により集落住民が目標を共有し、みんなで団結して行動するというむらづくりの礎が形成された。

ウ 現在に至るまでの経過等

こうした住民のむらづくり意識の高まりから、平成6年に、早崎を一層个性的で魅力あふれるものとするため、また、町民の広範囲な福祉充実のため町民総参加型のまちづくりを目的とした「早崎福祉J・H（join・handsの略で「手を結ぶ、手を携える」の意味）の会」を立ち上げることになった。

この「早崎福祉J・Hの会」では、①集落住民が横の繋がりを持てるようなコミュニティ活動、②早崎が「ふるさと」であることを認識で

きるような活動、③高齢、少子化への対策としての相互援助活動など、ソフト・ハード両面にわたる具体的な行動計画「早崎ジョイン・ハンズ計画」を新たに作成し推進することになった。



写真3 早崎ビオトープとコハクチョウ

また、平成13年秋に、「自然との共存」の名のもと早崎内湖干拓の一部が湛水化され、早崎内湖ビオトープ（日本最大のビオトープ実験地・400m×2000m・17㌔）が誕生した。

そこには晩秋になると約200羽（琵琶湖に飛来する360羽の6割）のコハクチョウが飛来し、周囲の水田で群れをなして二番穂を啄んでおり、住民はその姿を暖かく見守ってきた。

それに伴い、翌平成14年に町内有志でNPO「早崎ビオトープネットワーク」を設立し、ビオトープでの自然観察会を主催する活動などを通して、地域住民が自然と共存して暮らすことに一役を担ってきた。平成19年には早崎町住民全員で構成する「早崎・農地水環境守ろう会」を設立し、地域の用排水路沿線の維持管理をはじめ、水質調査や生き物観察など環境保全に全戸を挙げて取り組んでいる。中でも琵琶湖に近い水田排水路に魚道を設置し、湖魚を水田に遡上産卵させ稚魚が琵琶湖に戻るようにする「魚のゆりかご水田」事業に取り組み、対象田の米は「魚のゆりかご水田米」として県内外へ出荷している。また、水田ニゴロブナ繁殖事業（水田に稚魚を放流育成し琵琶湖に戻す事業）に取り組むなど、高齢化の進展に伴い後継者問題を抱える中にあっても住民が一体となって農水産資源の保全と地域づくりに励んでいる。

（2）むらづくりの推進体制

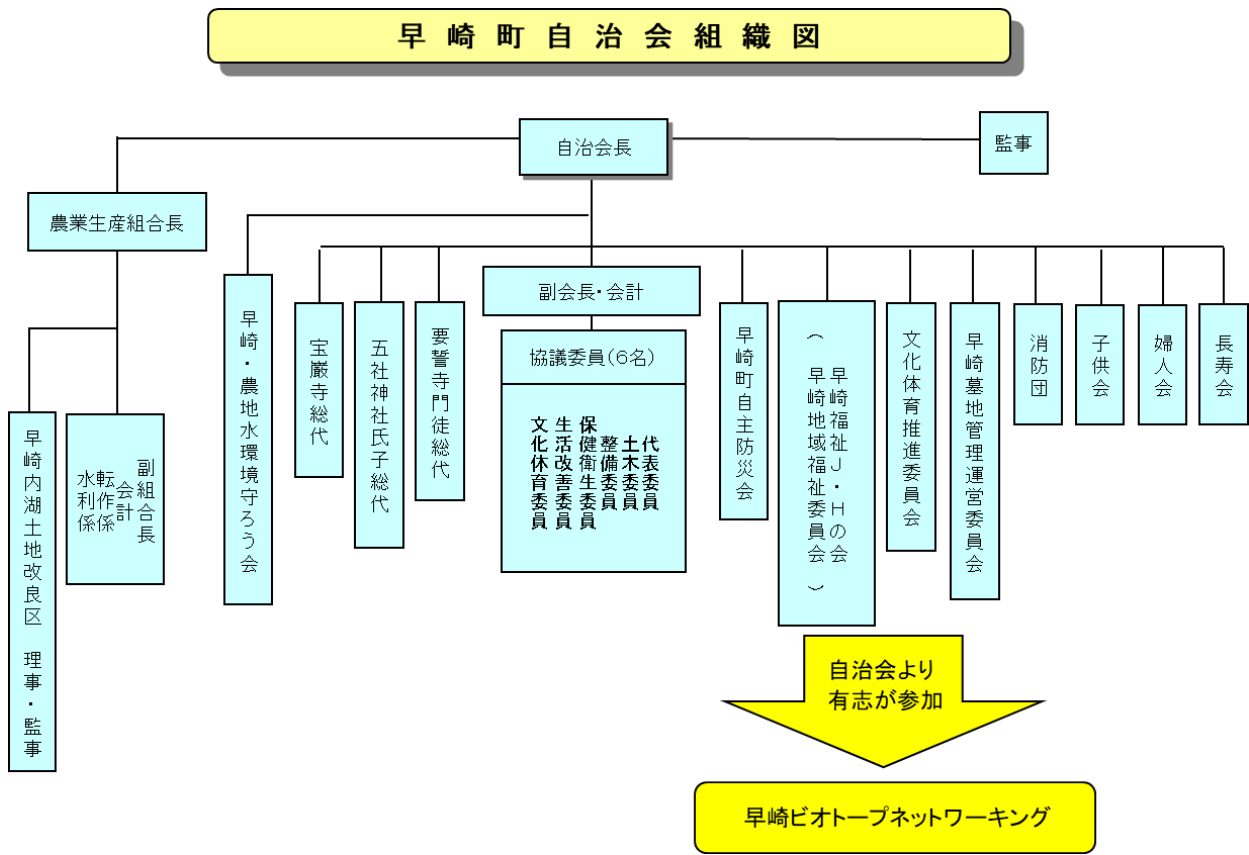
早崎町自治会は、早崎・農地水環境守ろう会、早崎ビオトープネットワーク等が連携し、総合的なむらづくりを推進している。

副自治会長は、基本的に集落内年齢順で特別な理由（介護・単身赴任等）がない限り総会で選出され、翌年自治会長となる仕組みをとっている。会計も同様に集落内の年齢順に総会で選出し、組織の要である3役が円滑に

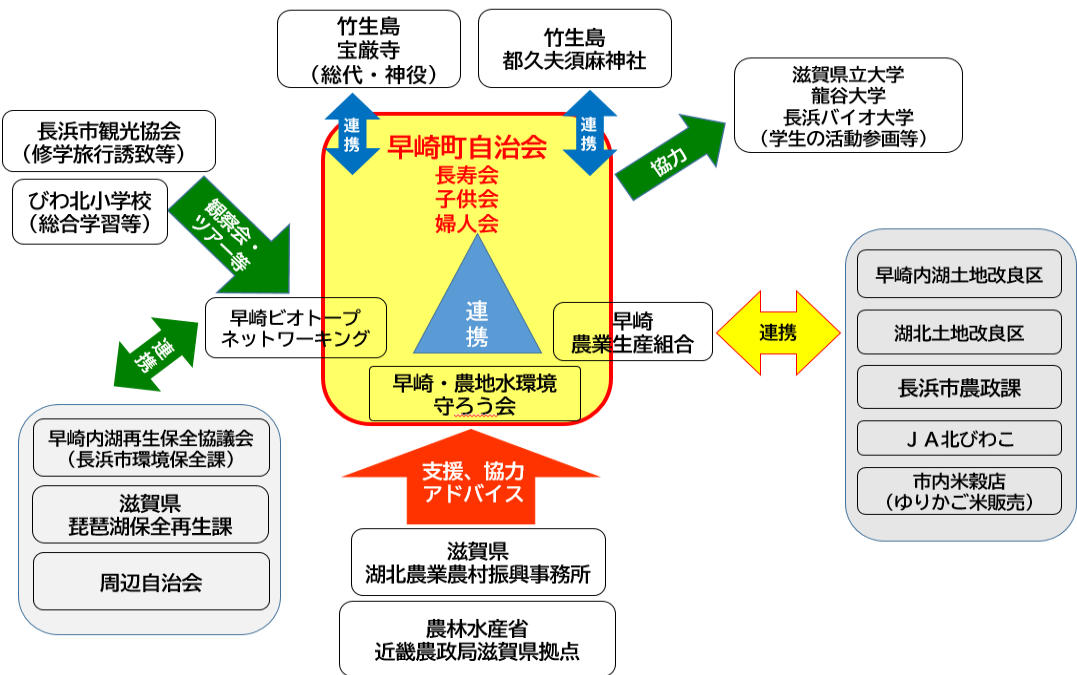
交代できるようにしている。

また、集落内にある6つの組から協議委員を選出し、協議委員から自治会長等へ助言をすることで集落の声をできるだけ活動に反映させるとともに、自治会活動の継承を促している。

第2図 むらづくり推進体制図



第3図 むらづくり連携図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

本地区は、干拓農地という生産面で不利な条件の中、農林水産省の補助事業の活用や多面的機能支払制度への取組により集落ぐるみで地域を守っている。

「早崎・農地水環境守ろう会」では、多面的機能支払制度に早くから取り組み、現在では 64.7ha で県内平均 38.3ha／集落の約 2 倍と県下屈指の面積を誇っており、「魚のゆりかご水田」の取組をはじめ、農地の保全、農漁業の振興、地産地消の推進、都市住民との交流など地域住民が一丸となって実践している。

また、NPO「早崎ビオトープネットワーク」を設立し、ビオトープでの自然観察会を主催するなど自然との共生に一役を担っており、早崎町住民の自然環境に対する意識は高い。環境保全活動にも熱心に取り組んでおり、更に地域コミュニティ活動や高齢化・少子化への対策としての相互援助活動のため「早崎福祉 J・H の会」を立ち上げ多面的な福祉活動を展開するなど、子どもから高齢者まで集落ぐるみでむらづくりに励んでいる。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農漁業生産面の取組状況

早崎町自治会がむらづくりを推進する中で、農業生産面は早崎町農業生産組合が、農地にかかる環境保全は早崎・農地水環境守ろう会が担っている。

「魚のゆりかご水田」は、大規模農家 2 戸を含む 4 戸で取り組んでおり、東京や大阪・神戸等の米穀店等の販路を開拓し、環境に配慮した特別なお米として最高 4 万 2 千円/60 kg (700 円/kg) で取引されている。また、ゆりかご水田米にあやかり、生まれた体重の重さのお米を「出産祝い」の返礼品として活用されるなど、早崎産米の名声を高める取組となっている。

当地区は、かつて漁師や魚をさばける者が多く、魚つかみや貝とりが住民の楽しみや食料確保につながっていたことから、琵琶湖の「幸」を食べる習慣が定着していた。当地区に代表されるこのような習慣は、琵琶湖の漁業と農業が共生し織りなす「琵琶湖システム」として平成 31 年 2 月に日本農業遺産に登録された。さらに、令和 4 年 F A O (国連食糧農業機関) により「世界農業遺産」に認定された。



写真 4 排水路の補修(農地水環境守ろう会)

また、「魚のゆりかご水田」を活用した排水路の清掃や水棲観察会の実施は、非農家の農業生産、農地保全に関する意識向上や農業生産組織、集落内の大規模農家の担い手確保・育成にも少なからず寄与している。

（２）生産力の向上、生産の組織化、生産基盤の整備等への寄与状況

早崎農業生産組合が主体となって共同機械（大豆収穫機・田植機・コンバイン・トラクタ等）を導入し、小規模農家の機械過剰投資を抑制している。小麦、大豆作は肥料、農薬の一括発注、麦作では防除や収穫を共同で行い、収益は一括清算管理するなど協業体制による効率生産に努めている。

また、大豆作では出荷量と品質による価格差を個人別に精算し、収量向上の意欲喚起を図っている。特に、当地区は、粘質土壌で排水性が悪く、以前は培土板で作畝して麦・大豆の生産向上に努めていたが、排水性がなかなか改善されず収量は低かった。そのため、農業組合で溝切機（オーガ式）を導入した結果、排水性が向上し、10 a 当たり大麦 8.5 俵、大豆 3.5 俵と地域平均より高くなった。



写真５ 時には田植機が沈没する
干拓田では助け合いが欠かせない

３．生活・環境整備面における特徴

（１）生活条件の改善による定住促進の取組状況

集落外から嫁いで来た女性の声を受け古い慣習に違和感を覚えたことがきっかけとなり、集落として伝統的な行事は維持しつつも住民が暮らしやすくするために、冠婚葬祭や法事、新築棟上げ時等の慣習を見直す「生活改善」を実施し、若者が就職後や結婚後も集落に住み続け、女性が働きやすく、誰もが暮らしやすい集落づくりを進めてきた。



写真６ 集落の神社「おこない」神事

毎年２月に「おこない」と呼ばれる「五穀豊穡」を祈願する神事についても、当番長老の４件の自宅で、餅つきや飾りつけなどの準備をしていたものを、４組まとめて公民館で実施するように改善することで、個人負担を大きく削減するなど、伝統行事を受け継いでいく条件整備を行った。

（２）福祉・コミュニティ活動の強化の取組状況

「早崎福祉Ｊ・Ｈの会」では、「私にも写せます」をキャッチフレーズに子どもから高齢者まで幅広い年齢層に写真を撮ってもらい展示する企画や、昔懐かしい催事や風景などの写真を取り寄せ展示した「思い出の写真展」の開催や、高齢者の匠の技であるわらじ作り、餅つき体験などを実施し、農村ならではのかつての慣習を肌で感じ住民みんなが現状の生活を振り返る機会を設けるなど様々な事業に取り組んできた。



写真７ よらん会ね・子ども会合同
「七夕祭り」

平成９年に、戦前の尋常高等学校の名前を模した「純情高齢者学校・いきいき学級」を立ち上げ、地元の高齢者の集いの場、学びの場としてＪ・Ｈの会が運営、また公民館を会場に火災予防講習会などの危機管理や健康管理、落語や演奏会の鑑賞など、講師等を招いて楽しみながら学んでもらうという企画を年１～２回開催している。

その他、公民館で毎月１回開催している高齢者サロン「よらん会ね」も高齢者の大きな楽しみと生きがいを提供する場となっている。

（３）環境整備・環境保全面での取組状況

ア 「早崎・農地水環境守ろう会」の取組

排水路の土手草刈りを年に２回、水中の藻上げを年に１回、集落総出で行い、景観づくりとして農道際へ「ムスカリ」を約３００ｍ植栽、管理している。あわせて滋賀県水産試験場から譲渡された１２２．５万尾／年のニゴロブナ（琵琶湖固有種）の稚魚を水田に放流・育成し、琵琶湖に戻す「水田ニゴロブナ繁殖事業」に取り組むなど住民が一体となって農水業資源の保全と地域づくりに励んでいる。

「魚のゆりかご水田」の活動では、従来の堰上げ式魚道と比較して、取付け・取外しが短時間で可能な「一筆魚道」方式を独自に開発した。この方式では、設置にかかる労力削減とあわせ、ゆりかご水田を行っていないほ場に影響が及ばないように１筆単位で魚道が設置でき、ゆ



写真８ 魚道の設置

りかごの取組の合意形成がしやすいメリットがあることから、市内岩熊地区や近江八幡市のゆりかご水田にも採用されており、「魚のゆりかご水田」の普及に大きな役割を果たしている。

また、ゆりかご水田の現況や早崎町の暮らしを「魚のゆりかご水田 in 早崎」として、Facebook でほぼ毎日情報発信を行っている。

イ 早崎ビオトープネットワークの取組

滋賀県と協働しながら環境保全活動を精力的に行っており、コハクチョウ観察ツアーをはじめ、龍谷大学環境社会学科や京都大学韓国留学生等の大学生の環境学習、修学旅行（東京：国分寺高校）の受け入れ、水棲生物観察、琵琶湖博物館学芸員を講師に招いてのビオトープ学習会の実施や湖魚を使った地元料理の試食など多岐にわたる。地元のびわ北小学校4年生の総合学習では、平成15年から現在まで18年間、室内でのビオトープ学習、現地でのコハクチョウ等観察会や、漁具作製、捕獲体験を実施しており、これまでに延べ45回開催、400人以上が受講している。

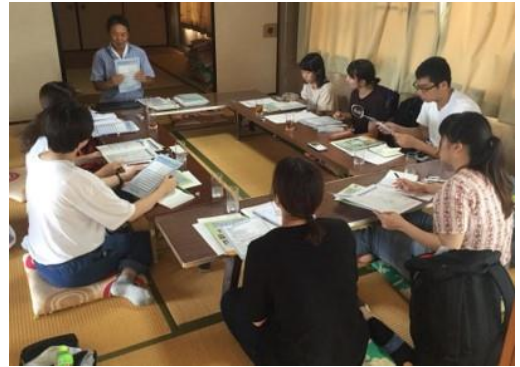


写真9 龍谷大学社会調査実習



写真10 小学生のビオトープ観察会

こうした、ビオトープ観察会・視察等は、年間随時受け入れており、平成14年から現在までに延べ150回、3,084人が当集落を訪れている。

琵琶湖に飛来するコハクチョウなど様々な野鳥に加え、メダカ等の在来種、ヒキガエルやカムルーチなどの外来生物などの生息調査のほか、タコノアシといった希少植物の回復状況など日本初の内湖再生実験による生物的变化について、早崎ビオトープ公式ホームページをほぼ毎日更新するほか、「早崎ビオトープ通信」を年3回周辺5集落へ回覧するなど、様々な媒体を使った情報発信も積極的に行っている。

高齢化が進展し農業人口が減少していく農村において、こうした環境活動を核とした一連の取組は、集落だけにとどまらず都市生活者、消費者、次代を担う世代など幅広い層との関係人口の増加に寄与するとともに、持続可能で発展的なむらづくり活動となっている。